

ガイドブックにない山地湿原巡り 2019

雨竜町 佐々木 純一

湿原・湿地を巡り、観察するのが大好きです。植物は、生き物は、形態は、湿原の不思議と魅力に、紛れもなく「泥沼」にはまっています。北海道は湿原・湿地の宝庫、でも数えるとキリがなく雨竜町内で5カ所はあります。小林・富士田は2019年に「北海道湿地目録2016」で面積1ha以上を主に185カ所をリスト、標高400m以上を山地湿原として61湿地をリストするが道が無い湿原も多く、最高標高は1789mの忠別沼湿原です。これまで118湿地を観察して、今回はリストにない北幌加トック湿原、蛇の月見湿原、じゅんさい沼も訪れ、基本一人だが奥さんは半分位同行して、北方山草会の皆さんにも大変お世話になり、感謝いたします。

トックアイヌの交易と浜益街道

北幌加トック湿原。新十津川町の徳富川上流部の北幌加地区、標高540mの台地に面積0.9haの小さな湿原がある。

相観的にヌマガヤ - ホロムイヌゲ群落が広く展開する中央部にミズゴケを欠き、湿性草原から乾燥化が進行している過程で、辺縁部のミズゴケパッチにツルコケモモ、ミツバオウレン、モウセンゴケなどが名残りを留める。特徴は島状に出現するチシマザサ群落に湿原では珍しい、多数のトドマツが生育して代表的景観となり(図1)、ミズナラ、アカミノイヌツゲ、イソツツジ、ツルコケモモ、ホロムイヌチゴ、エ

ゾイチゲ、ゼンテイカ、トキソウ、ホソバノキソチドリ、ヤマドリゼンマイなどを伴う。湿原で一般的なアカエゾマツの根は浅根性で地下水位が高くても順応して生育するが、深根性の樹種のトドマツの出現は、中央部が高く四方の辺縁に向い緩傾斜となる丸盆を伏せた形状で、降雨水などの排水が良好な地形の湿原特性を示唆している。

この地は1600年代からトックアイヌの生活圏で北前船の交易や狩猟の場で歩き、大将セッカウシは松浦武四郎を案内している。後に浜益街道となり吉野の西徳富駅通、北幌加の幌加徳富駅通を經由して浜益の泥川駅通と繋ぐ街道で利用されたが、現在は当別四番川を經由して街道は廃した。アイヌは生活に係わらない湿地を一般的にサルルンと言い固有名称を残さず、トックアイヌの関わりから北幌加トック湿原と名付けた。

ヤブ漕ぎのご褒美は...

ニセコアンヌプリ湿原。夏のニセコ高原は魅力的なルートで繋がれた山々と湖沼・湿原巡りが定番。2年越しで探し当てた6月の晴天の日、標高920mのチシマザサを当会の藤田豊さん、倶知安の中嶋さんと小田桐さんの4人で漕ぎました(図2)。

それは小さな湿原でミズゴケ類とツルコケモモ、ホロムイヌチゴ、モウセンゴケ、ホロムイソウ、ミツバオウレン、ミヤマイヌノハナヒゲ、ミカヅキグサ、ヌマガヤ、